
密室で、僕と友人ともう1人

迅雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

密室で、僕と友人ともう1人

【Nコード】

N8509M

【作者名】

迅雷

【あらすじ】

ある日、僕は友人から「百物語でもしないか」という誘われる。友人宅で起こる、一夏の…怪奇。

（前書き）

以下のことをお守りください。また怨みがかつていると充分な自覚がある人は是非どうぞ。

- 一、部屋を暗くしてみない。
- 二、とある一点を直視しない。
- 三、誰かに話さない。
- 四、そつと胸にしまいこむ。
- 五、読み終わりに何があっても、慌てない。

この作品は作者がとある人物への呪いを込めて書きました。

汗が頬に沿って行く感覚を味わって、脳内に打ち出されたキーワードは“キモチワルイ”のカタカナ六文字。思えば今は8月の中旬だ。暑くないわけもないし、日本特有のじめじめした空氣が無くなるわけでもない。それでもこの暑さを一時の間でも忘れていたとするならば、それはきつとこの場の氣味の悪い霽圀氣に違いないと決めつける。

お盆休みを家族と満喫した後、高校時代の友人が百物語でもしないかと誘ってきた。特に断る理由もなく、すぐに参加に同意したのだが、しかしそれを早々と後悔しつつある。というのも、律儀にも部屋 of 四隅の盛り塩を置いて“結界”を作るといふ具合の氣合いの入れようである。「やっぱこういうのは霽圀氣から作らないとね」と笑顔で語る友人の表情は若干引きずっていたのが印象深かった。

懷中電灯を消して、即座にライター蠟燭に火を灯した。「結構暗いな」と友人は言葉を漏らす。なんとかお互いがお互いの顔を確認出来るぐらいかと思いきや、辺りは真つ暗闇ばかりでどこに誰がいるかも分からない。

「一本だけかよ」と誰かが訊いた。因みにこの部屋に、他には同級生しかいない。電氣が消える前に確認した。「だって消したらまた付けたらいいじゃん」と相変わらず元氣のなさそうに言う友人。

「駄目だろ」

「でも一本しか持ってきてねーし」

「お前百物語知らないだろ」

「わりいわりい」

「知らないのかよ。じゃあ何でわざわざ誘ったんだよ」

Bannon、と苛立ったように床を叩く音がした。反射的に体が強張

る。

「いいから静かにしろ！」

いきなり友人は怒り始めたのだ。憤慨で、恐らくその顔は真っ赤なのだろう。友人の剣幕に思わず、僕と同級生は言葉を失い、顔を見合わせた。誘ってきたのは確かに友人だったはずだ。「そんなことも知らないのか」と友人を責め立てた同級生に、大いに賛成である。友人はぶつぶつと呟き始める。（僕は半分以上は聞き取れなかったが、概ねこんなことを言っていた）

「意味わかんねえよな。俺なんで。。。僕の名前」を誘ってんだ。わけわかんねえ、俺やっぱどうかしてるのかな。いやでもそうするしか方法がないって言ってたし、しょうがないんだよ。だから許してくれ……」

明らかに、いつもの友人の様子ではなかった。高校時代は喧嘩することも多く、口よりも先に手がでる性格で手間のかかる人である。その友人が誰かに向かって謝罪の言葉を何度も何度も繰り返している、とても正常な精神状態には見えない。こいつは本当に友人か、と錯覚させるほどであった。

「よし」と友人が決意したように言う。

「ごめん。。。僕の名前」しかいなかったんだ……助けてくれ」

正直言つて、すっかり友人を信頼できなくなっていたが、友人が静かに語る様子を察してあげて、敢えて何も言わなかった。口を挟む時間がないほど、友人は早口でしゃべり続ける。何でも、「誰かに真相を話せば霊は必ず許してくれる」という霊媒師の話を信じて

いることは分かった。

「誰でもいいから、誰かに話せばいいって聞いたんだ。だから。。
○（僕の名前）にだけ、警察にも誰にも話してないけど、話してお
く」

「うん」

「同級生と金銭トラブルになって。つかっとなってやちゃったんだ」

やっちゃった。何を？

「殺しちゃった」

誰を。いや、ちょっと待て。

頭の中で不協和音が響く。そのリズムはめちゃくちゃな音階で演奏されたシューベルトの“魔笛”とよく似ていた。

「同級生を？」

「ごめん。でも、あいつも悪いんだって、先に手を出してきたのはあいつの方なんだから」

僕はここで、横を確認するのが怖くなってうつむいた。

「何言ってるんだ」

「え」

「同級生なら横にいるだろ」

「嘘つくなよ」

友人はまた苛々し始めたようだ。対する僕は焦った。もう頬の汗なんか気にならなくなっていた。

「マジだつて」

ほらここに、と指差した先には闇しかない。そもそも、お互いの顔なんて分からないはずだったことに今更になって気づく。

「。。。 (僕の名前) しか誘ってない。ここにはずっと。。。 (僕の名前) と二人きりだったろ」

目を凝らすと友人の背後にはニヤニヤと笑う同級生が見えた気がした、と同時にもう友人は手遅れかもしれないということをとっさに悟った。

「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

しばらく何度も呟いた後、友人はほっと一安心したのか、それからずっと上機嫌だった。きっとあの姿は恐怖心が垣間見せた幻覚に違いない、と思わせるほど僕にも友人にも何も起きなかった。

それから何日かして、友人が亡くなった知らせを聞いた。死因は催眠薬を使った自殺で、金銭トラブルが原因だと新聞で確認した。

あれは友人が薬でおかしくなっていたんじゃないか、とふと思う時がある。実際、後悔の念から、同級生を殺めた日からろくに寝ていないらしい。

まあ何にせよ、事の真相は僕には分からない。そしてこの件に関してはあまり深く考えない方が幸せだ。僕は友人の話を聞いてあげただけなんだ。

（後書き）

前書きは嘘です（笑）

実際は一時間くらいでパツパツと書きちゃいました。でも、怖い話って自分で書くのも怖いものですね。相談では怖いのに自分が書くのと、あんまり怖いのになくなっちゃった。文章力がないのが悩みです。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8509m/>

密室で、僕と友人ともう1人

2010年10月13日20時25分発行